手塚治虫作品集―その５『鳥人大系』―

2009.05.24 更新

萩原義雄

はじめに　―『鳥人大系』について―

手塚治虫にとって生物は描く対象物にして、その動きは動画カメラで追うかのように正鵠そのものである。この作品は、凡て鳥類たちが主人公であり、これに人が脇役として関わるという設定立てである。全体は十八章から成る。

第一章「ウロロンカ・ドメスティカ・イグニス」
第二章「ラルス・フスクス・イグニス」
第三章「パイロマニアック・マグピー」
第四章「むかしむかし……めでたしめでたし」
第五章「オーベロンと私」
第六章「トゥルドス・メルラ・サピエンス（ブラック・バード）」

第七章「スポークスマン」
第八章「ドゥブルゥド査定委員会への要請」
第九章「うずらが丘」
第十章「クロパティア・ピティアルム」
第十一章「ポロロ伝」
第十二章「ミュータント」
第十三章「ファルコ・チンヌンクルス・モルツス」
第十四章「赤嘴党」
第十五章「カモメのジョンガラサン」
第十六章「ブルー・ヒューマン」
第十七章「ラップとウィルダのバラード」
第十八章「ドゥブルゥドへの査定委員会懲罰動議」

その章段を見るに概ねが「カタカナ」表記の題名が並ぶ。所謂、「カタカナ漫画」とでも云う感を有する短編作品群と云ってよかろう。

そこで、この「カタカナ漫画」としてその手塚治虫が示す「カタカナ」表記の語及び文章を分析し

て見ようと考えたのである。

「カタカナ文字」の漫画

カタカナは、古来言い伝えでは吉備真備が創作したと云う。漢字のなかよりある文字を選択し、その漢字の楷書形体の一部を取り出した省略文字である。この創作者吉備真備についてここで学習しておくと、

靈龜二年(七一六)、二十二歳で大學を終えた秀才の一人として遣唐留学生の選にはいり、翌三年三月遣唐使に随順って中国西都長安に渡った。在唐十九年、経史、刑史、兵法、算術、陰陽、暦道、天文、漏刻、音韻、書道、秘術、雑占といった十二道を兼ね修めた精通者として、日東学生ありと大唐に言い伝えられた人物である(唐史に依據する)。

天平七年に屋久島を経由して北東へ紀州和歌山に着岸して帰国した。直ちに大學に招かれ、序で中宮亮に任じられ、天平十三年(七四一)、東宮學士として皇太子(後の孝謙天皇)の師範となり、同じく十八年に吉備朝臣を賜り、翌年右京大夫となった。

孝謙天皇の天平寶字元年(七五七)四月、『孝經』一卷を藏せしめ、本邦の道德基準にしていく

こと、さらには、彼が学んだ音韻學に則って國語五十音を東宮學士の任にあったとき定めたという功績が知られる。彼は入唐中、韻學を研究し、天竺から傳來した悉曇の法に倣って、日本の音聲に轉し、音位を換えて五十音図を計ったのである。この對譯用いる漢字音に異なりが見られ、當時通用していた子音や訓を借りて暫定の對譯四十五字を定めたのである。この漢字の偏・旁・點・畫を省いて簡略な一体の文字としたのが「カタカナ」四十五字である。後に、弘法大師空海が「お」「ゐ」二音を増補して本音四十七文字にしたという。

アイウエヲ
ワ$\boxed{\text{イ}}$$\boxed{\text{ウ}}$$\boxed{\text{エ}}$$\boxed{\text{ヲ}}$
ヤ$\boxed{\text{イ}}$ユエヨ
ナニヌネノ
タチツテト
ラリルレロ
ハヒフヘホ
マミムメモ
カキクケコ

サシスセソ

※「□で枠を括った所が同音五字、猶「ヲ(乎)」「イ(伊)」を改めて「ヲ(於)」「井(囲)」に為したのが空海であるという。

大概となる「カタカナ」文字の発祥起源について述べてみたが、手塚治虫がカタカナ表記文字でマンガを描いたことに迫っていこう。

「鳥人」という知的生物について

手塚治虫は、第七章「スポークスマン」で、

「ことのおこりは――いつだったか忘れてしまった　ぼくは当時、無名で「SF」なるものを糊口をしのいでいた若僧だった　ある日とつぜん――れいのホシ・シンイチ」とかいう同業者のよく書く手――「ドアのノックの音がして」契約者がまい込んできたのだ　コッコッコッ／コッコッコッコッコッコッ〔74頁〕

ここで頭の大きな鳥が三文文士の許に訪ねてくる。物語はこうだ。

「アナタト契約シタイ」「アナタハ宇宙生物トカ　怪物トカ……人間以外ノ知的生物ノ描写ニス

グレタ腕ヲオモチダ」「ヒトツ　ワレワレノコトヲ書イテホシイノデス〝鳥人〟ノコトヲ」「依頼ヲウケテモラエレバ　アナタニノゾミノ謝礼ト　生活ノ保障ヲサシアゲマス」当時はテレパシーで人と話す鳥などかなり珍しかったものだ」〔75頁〕

「ま……仲間は信じないだろうね。鳥と契約して百万ドルももうかるなんて」「信ジナイ。シレハダメデス」「信ジサセルノデス！アナタノ筆ノチカラデヨムモノニ信ジコマセルノデス。鳥人ノコトヲ！」／「あのね、〝鳥人〟ってなんだい？」「ヤガテ人間ニカワッテ地球ヲ支配スルモノデス」／「ワレワレガ、アナタニ毎週、情報ヲオクリマス。ソレヲアナタガ文章ニマトメレバヨイ」／「そりゃ簡単だが……だれも荒唐むけいなSFだと思うぜ」「ダカラ、アナタノ説得力ガヒツヨウナノダ!!」／ぼくの日課がはじまった。／／タイトルは〝鳥人大系〟とした。／／ぼくのもとには鳥人のいろんな種類のいろんな資料がゴチャまぜにおくりこまれてくる。それを整理し、かたっぱしから発表した。そして、あの世界中の鳥さわぎだ。やがてぼくの書いたものはうばいあって読まれるようになり、いつの

まにか、ぼくは鳥人についての最高知識人にまつりあげられていた。／だがぼくは、憂鬱だった。／たんなる鳥人のスポークスマンにすぎないことに気がついていたからだ。〔76頁～77頁〕

と綴る。この三文文士の人と鳥人とのやりとりの会話表現箇所を表記法によって使い分けているのに気づくであろう。三文文士の人は「平仮名と漢字」、これに対し、鳥人は「カタカナと漢字」による表記を用いて区別しているのである。作家手塚治虫における「カタカナ」とは、何であるのか暫く注目していこう。

「鳥人」そして『鳥人大系』について

なぜ、禽獣のなかで鳥類をテーマに据えているのだろうか？天空を翔る翅を保持し、地上に舞い降りて人の如く二足歩行も可能な生き物であり、彼らが人類と同等の知能と技能とを備えたときを想像して描いた作品がこの『鳥人大系』そのものなのである。この作品の原素材提供は、第五章「オーベロンとわたし」の主人公サン・アンジェロ鳥類研究所のニーム博士がジープのなかで思い描く回想シーンに、

①むかしデュ・モーリアの「鳥」という小説があったな。鳥がわけもなく人間をおそう話だった。

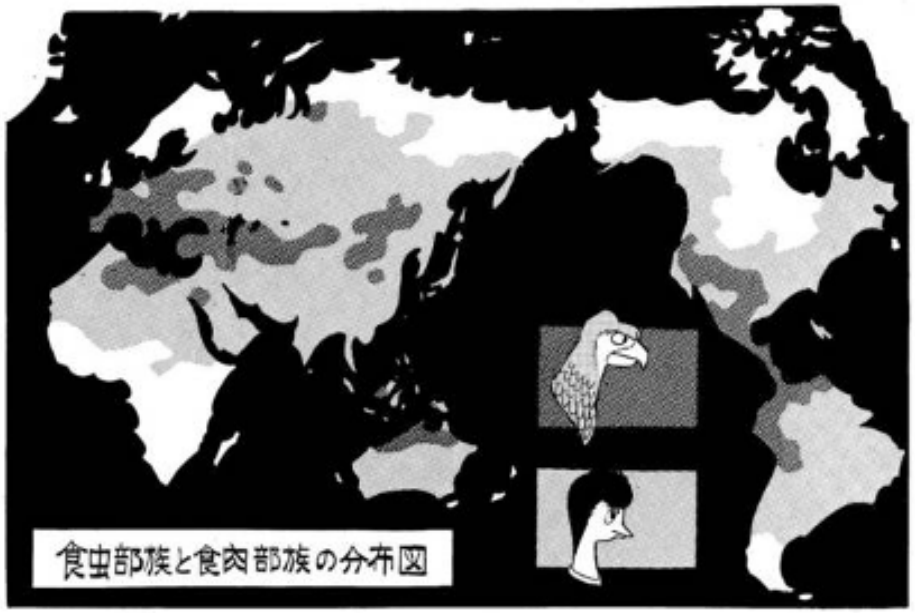
いま起ってるのはわけがちがう。鳥と人間の生存競争なんだ。生きるか死ぬかなんだ。〔43頁1コマ目〕

とある。だが、この部分には註記説明はない。読者は自らの意思でこの作者と作品名を手がかりにこの概要そして内容を知ることになろう。次に、手塚治虫が目指したところは、最初にも触れたように人類と同等の知能と技能とを備えることである。「天か

ら落ちてきた容器から溢れだした未知の粉末」が事の始まりである。ニーム博士がこの未知の粉を分析すると、十数種の蛋白質、数種の無機質のほかにはこれといった発見もない粉であるが、この粉を食した鳥が知覚変容を起こしたのである。

②ある日……突然私(鳥の領袖＝支配者「オーベロン」)になにかが語りかけた。その声は言ったのだ。……この宇宙には高度な知能をもった生物は必ず飛行する能力をもっていること……大気は、それらの飛翔のためにあること……その声の主は、はっきりと説明したのだ。この地球という星でも深い大気の層の中で、鳥類は高等生物として、進化するはずになっていたようだ。しかし、その進化のどこかがくるったのだ。ＣＡＴＡＲＨＩＮＩというみにくいけものの一族が鳥類にとってかわった……。空もとべず大気の尊さも知らない二本足のサルが！その声はつづけた……進化は正しく導くためのわれわれはほんのすこし修正をほどこした。鳥類は過去数億年の進化のおくれを一きょにとりもどすだろう。それによって、地上をはいずり廻っているホモという疑似高等生物は没落を余儀なくされるだろう。なぜなら異種族の知的生物が共存する天体はあり得ないからである。〔49頁～51頁1コマ目〕

という展開であった。第九章「うずらが丘」では、この鳥人が進化した。そして、



鳥人には人間のような人種的差別感情はなかったが、ばくぜんと二種類の性格的な区分けができ

た。虫や木の実を食べる部族と、肉を常食とする部族とである。二つの部族は、それでも表面的には親睦をつづけていた。おたがいに領土や権利をおかさないように暗黙の了解ができていた。しかし、心の中の不信と反発はどうしようもなかった。いずれこの対立が爆発して、血で血を洗うような争いになるだろうという予感はだれもがもっていたのだ。〔104頁〕

という展開である。そして、鳥人社会にも音楽・宗教・政治・法律が根付くことを綴っていく。とりわけ、食肉部族と食虫部族における確執についてである。だが、作者は食魚部族も忘れていない。第十五章「カモメのジョンガラさん」を描き出す。今、美しい音楽を奏でながらこの資料を作成している。不思議なことにどこからか鳥がやってきて、この音色に合わせるかのように美しい鳴き声で歌い出す。実に奇妙で不思議な状況の光景なのである。

日本言語文化研究Ⅱ現代編で目指すと「語注釈」について

この作品のなかで第四章は、「むかしむかし、……めでたし　めでたし」という「ひらがな」表記の題名の作品であり、どこがどう違うのかと云えば、説明文章が凡てカタカナ表記で例外としては漢数字「一、二」と「山」「大」と僅かな漢字くらいである。更に面白いところは、作者自身の註記に

よる意味記載がこの文章中に見えることである。

この物語の書き出しから終わりまでを掲載しておこう。

1，アルトコロニオジイサントオバアサン（註一）ガ　一ワノスズメ（註二）ニコキツカワレテイマシタ　オジイサンハ　タイソウヤサシク　スズメニツカエテイマシタガ　オバアサンハ　スズメヲニクンデ　イヤガラセヲ　スルノデシタ　（註一）もちろん人間である　（註二）パッスル・モンタヌス・イグニス　つまり火を使う雀　政府により保護され　人間に奉仕されている

2，オジイサントオバアサンハ　イツモヒモジク　ヤセコケテイマシタ　ナゼナラ、スズメニタベモノヲジュウブンアタエルタメニ　ジブンタチハ　ロクニタベルコトモデキナカッタカラデス（註三）　アル

ヒ、エンガワニ　ノリガオイテアルノヲミテ　オバアサンハ　（註三）鳥類捕獲禁止令が一九××年に施行され、いらい鳥はネズミ算式にふえた人間に養われている鳥は仲間の野鳥のために食料を供出させる責任があったからである　当然の結果として人間は食糧の欠乏を　うったええたが、もし　鳥の要求を拒否しようものなら、たちまち放火され、家もろとも自分の命まで灰にしてしまうことになるのであった

3，ヒトクチ　ノリヲ　ナメマシタ

4，スズメハ　タイソウオコッテ　オバアサンノ　シタヲキリトリマシタ　オバアサンハソノママナキナガラニゲテイッテシマイマシタ

5，×

6，オジイサンハ　ナントカスズメノ　ユルシヲウケヨウトオモイ　「シタキリスズメ　オヤドハドコダ」ト　ヨビナガラ　スズメノアジトヲサカシタ

7，「ココヨ　ココヨ　オジイサン」「ヤレヤレ　ヤットミツケタカ　ドレ　ゴメンクダレヤ」（註４）国営の鳥類のためのマンション一県に四十四カ所ある

8，「ニンゲンヲツレコンデイイノカ」（註五）「アレハ　オトナシイトショリダ　ワレワレニ　ホウシスルタイプノニンゲンダ　イレテヤレ」　（註五）鳥にはかならず頭脳のすぐれた先鋭分子が群にまじっていて、リーダーになっている

9，「ウチノバサマガワルイコトヲ　イタシマシテ」　オジイサンハアヤマリマシタ「マアコンドデケハユルソウ　ワレワレノチカラヲ　ミクビラヌヨウニナ」（註六）／（註六）鳥たちは人間とのコンタクトにコンピューターの擬声装置を使うのが普通である

10，「セッカクキタノダカラ　ショクジヲシテイキナサイ」ゴチソウガハコバレテキマシタ　「コレハコレハ　アルトコロニハ　アルモノデスネ」「ソノカハリ　ジョウケンガアル」

11，「ココニ二ツノツヅラガアル、モッテカエッテオマエノウチヘアズカッテモライタイ」「デハ　チイサイホウヲ」　オジイサンハ　ツヅラヲセオッテ山ヲオリマシタ

12，ソノコロオバアサンハ　マチヘニゲテキマシタ　マチニハ　オナカノヘッタヒトタチガウントイマシタ　ミンナ　トリヲニクンデイマシタ　「スズメナドニ　ニンゲンガ　シハイサレタマルモノカ」「フガ　フガ」（註七）

13，「ナントカ　ヤツラヲ　イチドニ　シマツスル　ホウホウハナイカシラ」「フガ　フガ」（註七）／（註七）舌を切られているので老婆のセリフは不明

14，「ソウダワ　ドクガスヲ　スズメノオヤドニブチコメバ　アットイウマニ　タイジデキルワ」「ドクガスハナニニスル」「アリュウサンガス　ナンカドウカシラ」「ナゲコムノハ　アナタヨ　オバアサ

ン」「フガ　フガ」オバアサンハ　ボンベヲツンデ　スズメノオヤドヘ　イキマシタ

15，オバアサンハ　ボンベヲ　ナゲコミマシタ　ボンベ　コロリン　コロリン　コロリン　スットントン

16，アットイウマニ　スズメタチハ　ミンナ　シンデシマイマシタ

17，オバアサンハ　ナニカタベモノガ　ナイカトオモッテ　ナカヘハイリマシタ　「オオキツヅラトチイサイツヅラガ　ナカニオコメガイッパイ　ドチラデモ　モッテイクガヨイ」

18，「フガ　フガ」オバアサンハ　大キイツヅラヲツンデ　ババガヒキダス　エンヤラヤト　マチヘモッテカエリマシタ　ヒモジイヒトタチハ　オオヨロコビ(註八)／(註八)雀には新米、人間には古古米が配給されていた

19，ツヅラヲアケタトタン、「ドカーン」ト大キナオトガシテ、オバアサンモ　マチノ人タチモ、ミンナシンデシマイマシタ　スズメモメデタクカタキヲウチ　ソノノチニニンゲンモ　オトナシクナリマシタトサ　ドットハライ(註九)／(註九)おしまいの意

ここで、カタカナ表記でこの物語全体が進められているのかを言及しておきたい。そして、手塚治虫作者自身の繰り出す註記説明が何を意味するのかを考察しておきたい。これが実に〝言わずもがな〟の今回の手塚作品全体へのアプローチとして拡張理解していくうえで、その大元であるからにほか

ならないからだ。

この作品の一貫したテーマは、人が人たる言語を自在に操り思考会話ができること、また、禽獣と異なる「火」を怖がらず使いこなす術を身につけていることが作品全体に描かれていよう。そして、人は鳥の卵を食し、肉を食すように、彼らも人間を食することができる。人が死ぬと土葬、火葬、水葬とその葬り方は多種多様であるが、ある民族には「鳥葬（ちょうそう）」という最も原始的な葬礼の儀式をもって行う地域もあるからだ。実際、日本にも『九相詩并圖繪』と云う小野小町・檀林皇后の野葬鳥瞰の漢詩とその九相圖繪が今日遺されている。最後に見ておこう。

※『小野小町九相詩絵巻』京都市左京区浄土宗、安樂寺所蔵

※『嵯峨天皇之后　檀林皇后廿七歳命終九想之圖』榮繼畫自筆・「狩野文庫画像データベース　画像一覧」　http://www2.library.tohoku.ac.jp/kano/05-000959/05-000959.html

※『九想詩諺解』（九相図）　大本一冊　元禄七年　永田調兵衛刊　山雲子（坂内直頼）著。　屍体が朽ちていく状況を九層相に分けて、人間の不浄性を観じて煩悩を断つ観法を「九想観」と云う。これを具体的な圖絵に仕立てた「九想図絵」。「九想詩」と云う詩歌で詠み絵解きなされ、中国の詩人蘇東坡、日本の弘法大師空海の漢詩が有名。本書は漢詩の注釈書である。九想の一は「新死相」、二は「膨張相」、三は「血塗相（けつとそう）」、四は「蓬乱相（ほうらんそう）」、五は「噉食相（たんじきそう）」、六は「青淤相（せいおそう）」、七は「白骨連相」、八は「骨散相」、九は「古墳相」。　http://www.iwata-shoin.co.jp/bookdata/ISBN978-4-87294-546-1.htm

〈参考資料〉

History.Channel.Life.After.People.avi　http://video.google.com/videoplay?docid=4939078184096254535

『人類の消えた世界』〔早川書房刊〕　http://www.hayakawa-online.co.jp/wwu/wwu.html

はじめに　サルの公案

第1部

1、エデンの園の残り香

2、自然に侵略される家

3、人類が消えた街

4、人類誕生直前の世界

5、消えた珍獣たち

6、アフリカのパラドクス

第2部

7、崩れゆくもの

8、持ちこたえるもの

9、プラスチックは永遠なり

10、世界最大級の石油化学工業地帯

11、二つのイングランドに見る農地

第3部

12、古代と現代の世界七不思議がたどる運命

13、戦争のない世界

14、摩天楼が消えた空を渡る鳥

15、放射能を帯びた遺産

16、大地に刻まれた歴史

第4部

17、ホモ・サピエンスは絶滅するのか？

18、時を超える芸術

19、海のゆりかご

おわりに　私たちの地球、私たちの魂

http://www.youtube.com/watch?v=m2hJnbQBRwY&feature=related